

批評と紹介

フィクレト・アダヌル & スライヤ・ファローキー編
オスマン朝とバルカン
——歴史研究の検討——

林 佳 世 子

本書は、バルカン諸国とトルコ共和国にとって共通の過去であるオスマン帝国が、それぞれの国の歴史学研究でどのように扱われてきたかを主たるテーマに編まれた論文集である。もともとなったのは、1992年ドイツ歴史学会大会のパネル・セッションという。その後、新論考も加えパネルから十年をへた2002年に本書は刊行された。この十年の間にバルカン半島を被った悲劇は、まだ記憶に新しい。ある土地がどの「民族」(だけ)のものかをめぐって争われ、多くの血が流された現場は、いずれもオスマン帝国の長い支配のもとで紛争前の住民分布ができあがってきた土地である。その意味でオスマン帝国期に関する歴史研究は現在の政治と深く結びつき、歴史家が保証する民族の歴史は民族意識の高揚と分かちがたく結びついていた。こうした状況が続くなかで、バルカン諸国とトルコ共和国の歴史研究の諸問題を扱う本書所収諸論文は執筆されたことになる。そこに多くの困難が伴ったであろうことは想像に難くない。編者によれば、アルバニアやセルビアについては、結局原稿が得られなかったという。以上の事情から、本書は、一冊の本としてみた場合、構成や内容の点でバランスのとれた書物とはいいがたい面をもっている。しかしドイツの大学に在職するオスマン史研究者を中心に編纂された本書には、ハンガリー、ギリシャ、ブルガリア、トルコの研究者が参加しており、複雑な問題に学問的な立場から挑戦した意欲的な論文集であることに間違いはない。

本書は序章を含め11編の論文からなる。編者の一人 Suraiya Faroqhi はオスマン時代のアナトリア研究をフィールドとする Ludwig-Maximilian 大学(ミュンヘン)教授。現在、世界のオスマン帝国社会・経済史研究のリーダー的存在である。もう一方の編者、Fikret Adanır は、ボーフムの Ruhr 大学教授。バルカン史、オスマン史を専門とし、『マケドニア史研究』(1979)などの著作で知られる。

本書所収論文は、上述のとおり、バルカン諸国とトルコ共和国のオスマン

史研究に関わる、互いに関連するテーマを扱うが、それ自身大きな問題群であり、全体としてひとつの結論が求められているわけではない。共通点は、むしろ、さまざまな論点の検証を通じて、著者たちが求めている研究の方向性に見出せるだろう。すなわち、先入観にとらわれず科学的であれ、感情的でなく客観的であれ、そして、自国・自民族中心でなく比較史的であれ、とする共通の志である。それを満たさない過去の研究が手厳しく批判されているが、それらは同時に、過去の「いきさつ」をのりこえるために必要な、それぞれの自己批判にも読める。ここでは本書所収論文の内容を紹介し、最後に全体へのコメントを加えることで本書の紹介としたい。

本書の前半には、オスマン帝国とトルコ共和国の知識人・歴史研究者の歴史認識をあつかう論文が並ぶ。すなわち、検討対象は、「トルコの歴史学」である。このうち第1章 Christoph Neumann 「困難の時代とよりよき自己——オスマン朝末期の歴史叙述におけるアイデンティティの規定と発展のための戦略、1850～1900」では、オスマン帝国の最後の50年間にオスマン帝国の知識人が、歴史叙述という形をかりて、どのようにその政治的主張を展開したかが描かれる。著者は、それが端的にあらわれる歴史上の場面として、オスマン国家建国に関する記述と、19世紀にエジプトが半独立にいたる過程の記述をとりあげる。著者によれば、例えば、オスマン1世らのイスラミ的なモラル性を強調する思想家ナムク・ケマルは、よきムスリム君主像の提示によりヨーロッパ諸国への抵抗と当時のスルタン政権への批判を意図した。エジプトのムハンマド・アリーの積極的な改革を賞賛する歴史家ジェブデト・パシャやアブドゥルラフマン・シェレフは、ヨーロッパ以外の場所に改革の手本を見出そうとする。このように、この時期の歴史叙述には、現実の政治に対する著者の政治的主張が色濃く反映し、その文脈での分析の必要性が結論づけられる。

第2章 Klaus-Peter Matschke 「Turkokratia への移行をめぐる研究課題——ビザンツ史家の立場から」—2章では、14～15世紀にビザンツ皇帝からオスマン帝国スルタンへとその支配者をかえた土地で、どのような歴史的变化がおり、また何が変わらずに受け継がれていったのかを検証する近年の研究が紹介される。すなわち、従来、深い断絶のあったビザンツ研究、スラブ研究、オスマン研究の間にひろがりつつある共同研究、あるいは、互いの研究成果を参照する傾向の成果として、徐々に明らかになりつつある移行期社会の実態が、本章のテーマである。著者が特に絶賛するのはジェマル・カファダルの研究⁽¹⁾である。著者によれば、従来の二項対立的理解（征服者と非征服者、支配者と臣民、イスラム教徒とキリスト教徒）では解釈できない現実、すなわち、征服者の側の柔軟性と被征服者の側の巧みな適応が、

農村、都市、教会組織、軍事、経済などの各場面で、明らかになりつつあるという。同時に、従来のオスマン研究＝トルコ研究、ビザンツ研究＝ギリシャ研究という先入観の打破を促す論考でもある。

3章 Büğra Ersanlı「ケマリスト時代の歴史学におけるオスマン帝国——衰退必然説」—3章では、ふたたび、過去におけるトルコの歴史記述の偏向性が追及される。1章のつづきといってもよいだろう。オスマン帝国の滅亡のあとに生まれたトルコ共和国の草創期（1920年代～1930年代末）には、自国中心のかつ荒唐無稽な「トルコ史テーゼ」が政府よりの学者により提唱され、多くの歴史家が否応なしにその議論にまきこまれた（その経緯は最近の永田雄三の研究に詳しい）⁽²⁾。本章が検証するのは、この混乱の時代にオスマン帝国史はいかに扱われ、その影響はどのようなものだったか、である。

誕生間もない共和国のエリートにとって、オスマン帝国の過去は否定されるべきものであった。非トルコの要素と宗教的色彩を色濃くもつオスマン帝国が、共和国イデオロギーに抵触したからである。このため、オスマン帝国を全体としてネガティブに描くこと、あるいは、オスマン帝国（少なくともその初期史）をトルコ人の民族国家として描くことは、共和国エリートの感情にそった歴史叙述の方法であった。こうして、オスマン帝国は、トルコ民族の勇者の活躍により初期の成功をおさめ世界帝国に発展したものの、その後は、多民族的な政府高官や後宮の腐敗に苦しみ衰退を続けていくものとして描かれ、19世紀の改革のリーダーたちさえもその腐敗のなかに位置づけられた。この結果、アタチュルクのトルコ革命は、先人のいない突然異変的な偉業ということになる。以上のオスマン帝国のマイナスイメージは、教科書や大衆の著作を通じて今日に至るまで根強く残っている。

ただし、本章の主要な部分は、以上の、すでによく知られたトルコ歴史学の問題点を紹介することだけではなく、実はその流れのなかでF. キョプリュリュ、İ. H. ウズンチャルシュル、Ö. L. バルカンのようなアカデミックな歴史家たちがいかなる立場をとっていたかの検証に費やされる。彼らは、それに完全にコミットしたわけではなかったが、しかしそれを覆すほどの抵抗ができたわけでもなかった。90年代以後の教科書批判、トルコ民族史イデオロギー批判のなかで槍玉にあげられることも多い彼らであるが、当時の状況を再現していくと、彼らにできることに限りがあったことも理解される。むしろ、彼らのはじめたアカデミックな、史料重視の歴史学研究によって、1930年後半以後、政府によって意図的につくられた歴史観とは異なるオスマン史像が姿を現しはじめた点にも著者の力点は置かれている。

4章 Hercules Millas「トルコ共和国の歴史学における非ムスリム少数民族—ギリシャ人の場合」—トルコ民族主義の政治的な意図による歴史記述

操作のもっとも典型的な例は、教科書や一般書における「ギリシャ人」の扱いに現れている。ここでは、イスタンブルやアナトリアのギリシャ系市民（著者を含む）を、トルコ人の子供たちが、自然に「よそのギリシャ人、外国政府の手先」と感じるように仕向ける教育が長く行われてきた現実が指摘される。点検されるのは、歴史教科書、一般向けの著作、研究書である。それらのなかでオスマン時代のギリシャ正教徒臣民や共和国のギリシャ人マイノリティ、あるいは隣国ギリシャがいかにあつかわれてきたかを検討し、その著者たちを「偏見度」に応じて分類する。確かにトルコ共和国の歴史教科書が多くの問題をかかえ、近年の批判にもかかわらず、根本的には変わっていないことは非常に残念なことである。自国中心主義と他者への偏見と誤認にみちた記述は、相当にひどい（あるいは、ひどかった）。ただし、同じような「偏向」は世界の各地で観察される。それゆえ、単に「敵国ギリシャ」イメージを増長させる記述の列挙だけでなく、その背後の計算尽くの「意図」や、教育の効果についても踏み込んだ分析がほしいところである。

5章 Johann Strauss「オスマン支配の現実と記憶——ギリシャ語在地年代記の記述にみる」－5章以後は、現在のトルコ共和国以外の旧オスマン帝国領での歴史観と歴史叙述が問題とされる。5章では、1章で指摘されたオスマン帝国エリートの歴史叙述とは対極の、地方社会で生まれ死んでいった人々による歴史叙述が検証される。ムスリムによるこの種の著作はほとんど発見されていないため、キリスト教徒社会でのこうした伝統は、今後の研究に重要であろう。ここでのサンプルは、それぞれ17世紀、19世紀、19世紀末に書かれた3編のギリシャ語の著作である。17世紀の年代記の著者 Synadinos は、地方の名士である。オスマン体制の内側に身を置き、オスマン帝国の行政官の善政により悪しきトルコ人地主が罰せられることを喜ぶ。彼のなかでは、トルコ人（＝ムスリム）も彼らキリスト教徒も、ともにスルタンの支配の下にあり、オスマン体制は自明のものである。ギリシャ独立後に、過去の回想録を残した Panayis Skouzes は、トルコ語交じりの口語的ギリシャ語で当時の様子を生き生きと記す。Skouzes はアーヤーンである Hacı Ali の圧政をアテネ衰亡の元凶として非難するが、同時にその矛先はキリスト教徒コジャバシュ（名士）たちにも向けられる。また19世紀末にキプロスの農民によって書かれたキプロスの歴史記録は、島での農業の出来不出来を左右する天候やイナゴの害を第一に心配し、さらに島でのめごとや宗教に頼る農民の心情を記したもので、そこに彼らの視点が伺える。知事の人事やオスマン帝国中央での出来事には特別な関心が寄せられることはないが、人口調査など、オスマン帝国の19世紀の近代化政策は身近に及ぶとそれも記録する。著者は、ここから早急な結論をだすことを差し控えているが、

支配されるものたちが見ていた世界が、これらギリシャ語史料から見えてくる。

6章 Antonina Zhelyazkova「歴史学からみたバルカンのイスラム化——南東ヨーロッパ史から」—続く第6章は、現在のバルカン諸国における歴史学研究で、各国のイスラム教徒住民の「起源」がいかにか扱われてきたかを検証する。中心は著者の出身地であるブルガリアにおかれているが、アルバニアやギリシャ、ユーゴスラビア（およびその後継諸国）の研究がバランスよく紹介されている。従来あまり知られていないこれらの研究の紹介だけでも有用であるが、著者はより積極的に、イスラム教徒住民をめぐる根強いステレオタイプに起因する誤認の横行に警告を発する。その誤認の背景にはバルカン諸国家のおかれた政治的状況と民族対立の構図があり、そのしわ寄せが、場合によっては各地のムスリム・マイノリティの「異質性」の証明に貢献する歴史研究となって現れているからである。もちろん、バルカン諸国の歴史研究のすぐれた成果も合わせて紹介されているが、各国の歴史学がややまった方向付けに利用された事例も少なくない。著者は、客観的な歴史研究の必要性を訴え、「新しい世代が偏見や憎しみをもちたずに生きていくことを望むなら、(多様な民族・宗教の人々が経済的・文化的に交渉をつづけてきたというバルカン半島の)人々の経験(の解明)を、現在のバルカン歴史学の中心的課題としなくてはならない」(p. 266)としめくくる。

7章 Fikret Adanır「ボスニア・ヘルツェゴビナにおける「ムスリム人」の形成——歴史学の立場から」は、第6章でもとりあげられたバルカン各地のムスリム人口のうち、ボスニア・ヘルツェゴビナのケースを、より詳細にとりあげる。本章では、まずその地の「セルビア語を話すイスラム教徒住民」が、19世紀以来いかに定義され、第二次世界大戦後、「民族としてのムスリム人」と定義されるにいたったかを時代を追って紹介したのち、当事者であるボスニアの人々が、第二次世界大戦後、自らの「民族」を確定するために、中世以来の民族史をどのように描いてきたかを、研究史を整理する形で紹介する。歴史学が過去の経緯を明らかにする学問であるなら、ボスニアのイスラム教徒たちの、「自分たちの祖先はだれなのか、どうしてこの地に自分たちは住んでいるか」の問いに答えるのも歴史学であらねばならなかった。しかし、歴史の現実には複雑であり、現在の人々の要請する「単純な答え」がそこから返ってくるには限らない。にもかかわらず、ボスニアの政治家は公式の場で「自分たちはトルコ人ではない」と宣言する必要にも迫られる。ここから、我々は歴史研究の「社会的責任」を考えさせられることになる。

第8章 Géza Dávid and Pál Fodor「ハンガリーにおけるオスマン史研究」は、ハンガリーにおけるオスマン史研究の歴史を整理し、ハンガリー史

全体の中でのその位置づけを明らかにする。Fekete や、Káldy-Nagy らの研究をはじめとする精緻な文書研究の伝統で知られるハンガリーのオスマン史研究が、一時のイデオロギー的な制約をこえて、政治史、行政史、人物史、経済史、人口動態史、軍事史、キリスト教史、文化史などの各分野ですぐれた研究成果をあげていることが紹介される。ハンガリー語での出版が多数を占めるが、ハンガリー国内で英語その他の言語で出版されている研究が少なくないことも注意をひく。ハンガリー史のなかでは、従来、150年間のオスマン支配時代は人口減、都市破壊の時代とされ、マジヤール人国家退潮の元凶とされてきた。根拠に乏しいこうした定説は、今日の客観的な研究によって書き換えられつつあるという。経済的、文化的停滞をはじめとする諸問題の責任をオスマン支配に押し付ける傾向は、旧オスマン領域の多くで見られることであるが、ハンガリーの場合は、その期間が短かったせいもあり、比較的冷静にその見直しが進んでいるといえるのだろう。

以上、オスマン帝国末期からトルコ共和国のもとで行われてきたトルコの歴史研究、さらに独立後のバルカン諸国の歴史研究を批判的に検討してきた本書の最後は、編者の一人 Suraiya Faroqi による第10章「政府との妥協、在地勢力との妥協——16世紀～19世紀初頭のオスマン帝国の地方社会と名家」によって締めくくられる。ただし、オスマン帝国の地方社会の多様性と各地の地方名士についての分析手法を論じる本章が、本書全体の流れとはかなり色合いのちがう論考であるという印象はぬぐいきれない。

著者の意図は、オスマン帝国の中央（イスタンブル）と地方（アナトリア、バルカン地域、アラブ地域）の協力関係と緊張を、現在の国境線と関係なく、当時の関係である「中央—地方」の枠組みで「それ自身の問題」として考察することにあるといえるだろう。本書の性格を反映して、研究史に目が配られてはいるが、著者の関心は、「オスマン帝国下の地方社会の構造」の解明にある。ここでは、オスマン帝国下のアラブ地域の都市や地方名士についての研究も積極的に紹介されている。しかし、本書全体の試みが、近代以後の各「国」の歴史学研究の特質の点検に向けられていることを思うと、第10章⁽³⁾だけがオスマン帝国史の固有の研究課題にもつけられている点で違和感が残る。その思いは、その著者が編者の一人であるだけに、いっそう強くなる。同様の感想は、実は、本書の長い「序章」に関してもいえる。「序章」では、第10章よりも広汎に、オスマン帝国史研究の近年の傾向とその課題がまとめられている。オスマン帝国を学ぶものには大家によるそのガイダンスは非常に有用であるが、ただし、それがこの本の「序文」として適切なかどうか、本書所収論文の理解のためにほかに解説されるべきことがなかったかどうか、いささか疑問が残るところである。

本書が、非常に情報量の多い、意欲的な論文集ではあるにもかかわらず、全体としてのまとまりを欠く印象を与える原因はこの点に起因するように思われる。すなわち、本書のなかでは、(近代以後の、特に現在の)オスマン帝国に関する歴史研究の手法・目的・バイアスそのものを検討する論文群と、研究史の整理を通じて実際のオスマン帝国像の検討をめざす論文群の二者が混在している。もちろん研究史の整理の目的はそのいずれかである必要はない。しかし、本書の場合、バルカン諸国やトルコ共和国における史学史の過去と現状が適切に紹介されているだけに、両者が意識的に区別されていれば、本書全体のめざすものがより明確になっただろうと思われる。

そして、本書全体のもつ意義が前者のグループにあるとすれば、その議論を、今回のバルカン諸国とトルコ共和国での歴史研究にとどめることなく、オスマン帝国のもうひとつの重要な領域であるアラブ地域にも広げてもらいたかった。Faruqi による第10章では、アラブ地域の地方社会と都市研究、名士研究が紹介されるが、前述のようにそれはアラブ諸国での研究状況を検討対象としたものではない。アラブ地域における過去のオスマン帝国の記憶の検討を *The Ottomans and The Balkans* と題された本書に求めるのは無いものねだりであるが、本書で行われた試みが *The Ottomans, the Balkans, and the Arabs* というかたちで、今後さらに拡大され、オスマン帝国の遺産の検討が進むことを期待したい。

最後になるが、本書に付された網羅的な文献リストが非常に有益であること、本文中に単純な入力・レイアウトミスと思われる箇所が散見することが惜しまれる点を付記しておきたい。

註

- (1) Cemal Kafadar, *Between the Two World: The Construction of the Ottoman State*, Berkeley-Los Angeles-London, 1995.
- (2) 永田雄三「トルコにおける「公定歴史学」の成立——「トルコ史テーゼ」分析の一視角」寺内威太郎他編『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの』刀水書房、2004年
- (3) このほか、第2章も、同じ傾向をもつといえるだろう。

Fikret Adanır & Suraiya Faruqi (eds.), *The Ottomans and the Balkans: A Discussion of Historiography*, Brill: Leiden-Bsoton-Köln, 2002, vi+445p.